

平成22年 6月17日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19320066  
 研究課題名（和文）東アジア角筆文献の発掘とその交流の調査研究  
 —醍醐寺蔵宋版一切経の調査を主に—  
 研究課題名（英文）The Study of an influence-related investigation with interchange of  
 the language culture in the ancient East Asia  
 研究代表者  
 小林 芳規（KOBAYASHI YOSHINORI）  
 広島大学・大学院文学研究科・名誉教授  
 研究者番号：10033474

## 研究成果の概要（和文）：

醍醐寺蔵宋版一切経 6,104 帖の悉皆調査により、角筆の書き入れを調べ、古代東アジアにおける言語文化の交流と影響関係を考察する目的の本研究は、2007～2009 年に 5 回の現地調査を行い、書誌事項と共に角筆の有無を調べ、4,453 帖に角筆による漢字と諸符号の書き入れを見出した。その精査は第二次調査を期している。又、東大寺図書館の調査で、唐代写経に角筆の梵唄譜とフコト点様の単点・複点を発見し、新羅写経に角筆の新羅語の真仮名等と符号を発見して、解読を進めている。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to conduct an influence-related investigation with interchange of the language culture in the ancient East Asia.

For achievement of the purpose, We examined book published in the Sung dynasty all the Buddhist sutras possessed by Daigo-ji Temple. The investigation performed five times in total during 2007-2009 years. As a result, We found the kanji by the stylus gloss and the insertion of many marks to 4,453 quires.

In addition, in the Todai-ji Temple library, We investigated copying of a sutra of the Tang age.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2008 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学，日本語学

キーワード：東アジア 角筆 朝鮮半島 宋版 一切経 醍醐寺 角筆文献  
 新羅華嚴経

## 1. 研究開始当初の背景

角筆という筆記具を使って、その尖端で紙面を押し凹ませて文字や絵や符号などを書いた古文獻（角筆文獻）は、1961年（昭和36年）に第一号が日本で発見されて以来、毎年発見が続き、2006年（平成18年）までの45年間に、近畿の古寺社を中心に日本全国から3550点を越える文獻が発掘されている。この間、2000年夏の韓国調査では11世紀の初彫高麗版等から角筆で書き入れた漢字や点吐（ヲコト点）・口訣字（仮名）等が発見された。その結果、角筆が東アジアの漢字文化圏において曾て使われたことが分かってきた。角筆で書かれた文字や符号を検討すると、影響関係のあることも考えられるに至った。その中で、漢字文化圏の中心的位置にあった中国大陆の寺院使用の新たな角筆文獻が、醍醐寺に将来され伝存している宋版一切経の予備調査で発見された。その六千余帖の全体を調査し、角筆加点を掘り出し、日本の古訓点資料・角筆文獻及び韓国の角筆文獻と比較考察することによって、古代における交流の問題を、現存資料に即して具体的に解明する道が拓ける可能性が考えられた。小林芳規『角筆文獻研究導論 上巻 東アジア篇』、『同 中巻 日本国内篇（上）』『同 下巻 日本国内篇（下）』（各2004年刊）

## 2. 研究の目的

(1) 醍醐寺蔵宋版一切経六千余帖の悉皆調査と角筆加点確認調査

醍醐寺蔵の宋版一切経六千余帖は東禅寺版と開元寺版（大般若経）を伝える。東禅寺版は、元豊二年（1079）年から乾道九年（1173）に亘る刊行で、紹熙二年（1191、建久二年）に重雕された帖がある。

東大寺の重源が自著に「上醍醐」に奉納したと記し、醍醐寺座主の義演准后も、建久六年（1195）年に重源が施入したと記し、これに擬定されている。

昭和37年に文化庁が調査し、重要文化財に指定されたが、角筆の書き入れには気付かなかった。平成17年と18年の予備調査（延べ10日間）で、350帖を任意に調べ、75帖に角筆の書き入れを確認した。そこで、六千余帖について悉皆調査を行い、角筆の書き入れの有無を調べることにした。

(2) 醍醐寺蔵宋版一切経の角筆点の内容の考察

角筆は、漢字の注、節博士、合符、句切点、韓国の点吐（ヲコト点）に酷似した点法が施されている。中には『菩薩睺子経』のように、一帖の全巻に亘って「ヲコト点」様を主とする角筆加点があるものも存する。角筆の加点は全体として朝鮮半島の諸符号に似ているが、「ヲコト点」様の符号など相違するもの

もあり、中国宋代の資料の可能性が大きい。

醍醐寺蔵宋版一切経に角筆の加点が見付かったことにより、日本の諸寺に伝存する宋版一切経の角筆調査も将来の課題となるが、先ずはこの調査を通して、中国宋代の經典読解の実態を具体的に初めて明らかにする可能性が大きく、新資料を発掘提供することになる。

(3) 朝鮮半島・日本の角筆文獻・訓点との比較

角筆で紙を凹ませて書いた文字や符号等は、毛筆のような墨色・朱色などの色が着かないので、今まで古文獻を研究する学者に見逃されてきた。この研究の代表者や分担者の発掘調査によって初めて、その存在が知られ、日本の全土に遺存していて曾て全国的に使われたこと、日本だけでなく、朝鮮半島でも新羅時代から19世紀まで使われたこと、中国大陆でも漢代から清代まで使われたらしいことが分かって来た。

漢字文化圏の中国・朝鮮半島・日本の、言語も文化も歴史も異なる三国が經典や漢籍という漢文を学問の対象として読解し受容するに当たり、角筆という同じ方法で行ったことが分かった結果、相互に比較し、その影響関係を調べ、交流の軌跡を探ることも新しい課題として可能となって来る。

そのために、東大寺蔵の新羅写経や奈良・平安時代の訓点（角筆、白・朱点）を関係分担者が調査し、比較研究をも行う。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の主要な作業は、六千余帖に書き入れられた角筆文字・符号等の発掘調査である。この宋版一切経は重要文化財に指定され、醍醐寺蔵に六百余箱に分けて秘蔵されているから、調査は醍醐寺に出張して行う必要がある。

醍醐寺の開祖聖宝の1100年御遠忌を2009年に迎え、その時までには宋版一切経の角筆書き入れ有無の第一次調査を終えるという寺の希望と、寺の年間行事との都合で夏八月と春六月（又は五月）の年二回とし、一回は6日間とし、三年計画で、第一次調査を終える。

(2) 宋版に書き入れられた角筆文字・符号は、凹みが薄く、紙の繊維と紛らわしく、発見するには角筆スコープという角筆文字解読のために開発した光学機器を使い、角筆発見の経験者が、經典本文の一行一行を注意深く探さねばならず、六千余帖の全部について角筆の有無を調べるには、多くの時間と労力が必要であり、代表者と分担者全員が当り、調査の進捗に応じて連携研究者の協力も得る。

(3) 宋版一切經の角筆点との比較考察のために、代表者及び比較内容に関する研究を進行する分担者として、東大寺図書館において、奈良時代の角筆点と平安初期角筆点・白点調査をする。

#### 4. 研究成果

(1) 宋版一切經の角筆加点の発掘調査

① 醍醐寺蔵本——折本 6,104 帖を現存し、平成 19・20・21 年の 3 ヶ年に亘る現地調査で、4,453 帖に角筆による漢字と諸符号の書き入れが認められた。計 5 回（1 回は 7 日乃至 6 日）の調査により、以下のように発掘された。

第 1 回 757 帖（75 函）を調査し、角筆書き入れ帖 519 帖（平成 19 年 8 月 17 日～22 日）

第 2 回 785 帖（76 函）を調査し、角筆書き入れ帖 567 帖（平成 20 年 5 月 31 日～6 月 5 日）

第 3 回 1288 帖（123 函）を調査し、角筆書き入れ帖 1004 帖（平成 20 年 8 月 17 日～22 日）

第 4 回 2124 帖（213 函）を調査し、角筆書き入れ帖 1556 帖（平成 21 年 5 月 30 日～6 月 5 日）

第 5 回 1150 帖（117 函）を調査し、角筆書き入れ帖 807 帖（平成 21 年 8 月 17 日～22 日）

第 3 回以降に調査帖数が増えたのは、代表者・分担者の他に、新たに連携研究者を加えたことと、調査方法を改良したことによる。（巻首・巻末の写真を撮り、各自が原本調査前の予備調査を行ったことによる）

角筆加点の内容は、漢字の注、梵唄譜（節博士）、合符、句切点、各種線点（声点を含む）、韓国の点吐（ヲコト点）に酷似した単点・複点（文法機能点）である（小林芳規「日本に伝来した宋版一切經の角筆加点——醍醐寺蔵宋版一切經の角筆点と韓国の角筆点吐との関連」醍醐寺文化財研究所研究紀要第 22 号、2009 年 8 月）。

この調査（第 1 次調査）は、角筆の書き入れの有無を主とするものであり、6,104 帖の全帖を一通り調べることに重点を置いたので、一帖毎の精査は多量のために出来ず、それは第 2 次調査で行うことにした。

又、第 1 次調査では、角筆加点の有無を調べるのと併行して、刊記、印記、刻工名、捨銭刊記、勘経記など刊本としての書誌事項も採録し、目録の素稿も作成した。

醍醐寺蔵宋版一切經は、東大寺の重源が「上醍醐」に奉納したと自著に記し、建保六年七条女院庁の庁宣にも、重源の将来経を建久（1190—99）の頃、供養し醍醐寺境内に経蔵を建立して収納したと記し、これに擬定されている。今回の調査で折本 10 帖ずつを納

めた中国製の漆塗木箱の第 285 函に、中国の慶元四年（1198）に漆匠鄭昌らが墨書した文字が見出されたので、重源の生存時に中国から伝来したことが裏付けられた。

② 神奈川県称名寺蔵本等の一切經の角筆加点の発見——称名寺の宋版一切經の一部が流出し、鈴鹿三七氏（蔵書家）を経て愛媛大学附属図書館に現蔵される『宗鏡録卷第二十二』（東禅寺版）に、角筆による梵唄譜、合符、ヲコト点様の文法機能点と、四声点かと考えられる線点が認められた（平成 19 年 2 月調査）。又、慶応義塾図書館蔵磧砂版の宋版一切經の『大般若波羅蜜多經卷第五百十一』や京都三聖寺旧蔵本の宋版一切經で、愛媛大学附属図書館蔵『中阿含經卷第五十六』（東禅寺版）からも同種の角筆加点が発見され、醍醐寺蔵本が、日本に伝来し諸寺に現存する宋版一切經の角筆点調査必要の基を作った。

(2) 中国大陸の唐代の角筆加点本の発見

唐代に写経した『仏説大安般守意經』（東大寺図書館蔵）一卷から角筆の梵唄譜とヲコト点様の単点・複点等が見付かった（平成 19 年 9 月調査）。分担者の原卓志は、その単点・複点の全用例を帰納して、句切と熟合の機能を示すとの提案をした（原卓志「東大寺図書館蔵唐写経『大安般守意經』角筆点の分析」平成 21 年 8 月 21 日）。醍醐寺蔵宋版一切經の『大安般守意經』（第 303 函）にも角筆加点があり、唐写経の角筆点と比べて共通点と相違点を明らかにする課題が生じた。

(3) 朝鮮半島の新羅經の角筆加点の発見

新羅語を真仮名（一部に省画体）を使って角筆で全巻に亘って書き入れた『大方広仏華嚴經卷第十二～卷第二十』（合一卷）が東大寺図書館から発見された。調査解説中である。角筆は梵唄譜や合符も使っていて、これが中国大陸の唐写経や宋版一切經に角筆で書き入れた梵唄譜や合符に共通する。これらの角筆加点は日本の奈良時代の經典の訓点・訓読への影響が考えられる。（小林芳規「角筆による新羅語加点の華嚴經」南都仏教 91 号、平成 20 年 12 月。同「日本の經典訓読の一流一助詞イを手掛りに」汲古 55 号、平成 21 年 6 月）。

(4) 宋版一切經の角筆符号の解説作業

醍醐寺蔵宋版一切經の角筆加点の符号、特に、ヲコト点様の「文法機能点」の読解作業を、全巻撮影した『菩薩睽子經』を資料として、広島大学において、代表者・分担者・連携研究者の有志が、月 1 回の割合で平成 21 年 10 月から行い、角筆精査による第 2 次調査に備えた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 28 件)

- ① 日本に伝来した宋版一切経の角筆加点—醍醐寺蔵宋版一切経の角筆点と韓国の角筆点吐との関連—, 小林芳規, 「醍醐寺文化財研究所研究紀要」, 査読無し, 第 22 号, 2009 年, pp.1-24.
- ② 日本の經典訓読の—源流—助詞イを手掛りに—, 小林芳規, 「汲古」, 査読有り, 第 55 号, 2009 年, pp.1-10.
- ③ 法華経の陀羅尼の読誦について, 沼本克明, 「安田女子大学大学院文学研究科紀要」, 査読無し, 第 14 集, 2009 年, pp.1-19.
- ④ 東北日本・日本海沿岸地域を対象とする角筆文献データベース作成に向けての基礎的研究, 鈴木恵, 「平成 17~20 年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書」, 査読無し, 2009 年, pp.1-4.
- ⑤ 改編本類聚名義抄における注音方式の再検討—傍仮名音注・声点の朱墨について—, 山本秀人, 『古典語研究の焦点』(武蔵野書院), 査読無し, 2009 年, pp.427-452.
- ⑥ 『水鏡』における漢語—その用語選択をめぐって—, 青木毅, 『古典語研究の焦点』(武蔵野書院), 査読無し, 2009 年, pp.699-720.
- ⑦ 角筆による新羅語加点の華嚴経, 小林芳規, 「南都仏教」, 査読無し, 第 91 号, 2008 年, pp.1-18.
- ⑧ 日本語訓点表記としての白点・朱点の始原, 小林芳規, 「汲古」, 査読有り, 第 53 号, 2008 年, pp.1-11.
- ⑨ 東アジアの角筆文献から見る片仮名の起源, 小林芳規, 「比較文化」, 査読無し, 第 54 号, 2008 年, pp.3-6.
- ⑩ 日本語における訓点資料の展開—音読の視点から—, 沼本克明, 『「訓読」論—東アジア漢文世界と日本語—』(勉誠出版), 査読無し, 2008 年, pp.123-150.
- ⑪ 聖教の伝承と護持, 沼本克明, 『石山寺の信仰と歴史』(思文閣出版), 査読無し, 2008 年, pp.138-163.
- ⑫ 高山寺妙法蓮華経の声明譜本—一字音点と節博士—, 沼本克明, 「平成十九年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集」, 査読無し, 2008 年, pp.113-130.
- ⑬ 古訓点の改変について—藤原頼長加点「因明論疏」をめぐって—, 月本雅幸, 「国語と国文学」, 査読有り, 第 85 巻第 8 号, 2008 年, pp.1-13.
- ⑭ 高野山大学蔵「大般若経音義」(室町後期写本)について, 山本秀人, 「高知大国文」, 査読無し, 39, 2008 年, pp.1-33.
- ⑮ 変体漢文解読の方法と実際—変体漢文訓点資料の諸相—(韓文), 山本真吾, 『韓国文化』, 査読有り, 44 号, 2008 年, pp.269-287.
- ⑯ 小論陸機之書, 佐藤利行・郭穎, 「日本学」, 査読無し, 創刊号, 2008 年, pp.45-49.
- ⑰ 正岡子規の漢詩, 佐藤利行, 「広島大学大学院文学研究科論集」, 査読無し, 第 68 巻, 2008 年, pp.1-9.
- ⑱ 『尾道・西國寺における修学・付法活動の調査研究—中・近世の聖教・典籍を中心として—(西國寺調査研究報告書 第五号)』(平成 19~22 年度科学研究費補助金基盤研究C-2 研究成果報告書〔第 1 冊〕), 加藤優・濱田宣・青木毅編(共著), 査読無し, 2008 年 3 月.
- ⑲ 東アジアの角筆文献—その交流の軌跡を辿る—, 小林芳規, 「和漢比較文学」, 査読無し, 第 38 号, 2007 年, pp.1-43.
- ⑳ 日本訓点の—源流—(韓国語), 小林芳規, 『漢文読法と東アジアの文字』(韓国・太学社刊), 査読無し, 2007 年, pp.19-53, 巻なし.
- ㉑ 松本市立図書館蔵重文宋版漢書訓点解題, 沼本克明, 『松本市立図書館蔵重要文化財宋版漢書』(汲古書院), 査読無し, 2007 年, pp.61-98, 巻なし.
- ㉒ 陀羅尼訓点の背景—口受・対受—, 沼本克明, 「平成十八年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集」, 査読無し, 2007 年, pp.51-68, 巻なし.
- ㉓ 高山寺蔵梵字文献目録(稿), 沼本克明, 「平成十八年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集」, 査読無し, 2007 年, pp.69-83, 巻なし.
- ㉔ 訓点資料目録について, 月本雅幸, 「國學院雑誌」, 査読無し, 第 108 巻第 11 号, 2007 年, pp.257-266.
- ㉕ 高野山金剛三昧院蔵「三教指帰注抄」について—覚明注の成立に及ぶ—, 山本秀人, 「高知大国文」, 査読無し, 38, 2007 年, pp.22-50.
- ㉖ 『今昔物語集』における「アヒグス(相具)」の文体的性格について, 青木毅, 「國文學攷」, 査読有り, 第 194 号, 2007 年, pp.1-14.
- ㉗ 大福光寺本『方丈記』の本文をめぐって—平仮名本文先行の可能性—, 青木毅, 「徳島文理大学文学論叢」, 査読無し, 第 24 号, 2007 年, pp.77-85.
- ㉘ 『瀬戸内における地方寺院所蔵資料の調査研究—尾道・西國寺所蔵聖教を中心として—(西國寺調査研究報告書 第四号)』(平成 16~18 年度科学研究費補助金基盤研究C-2 研究成果報告書〔第 3 冊〕), 加藤優・濱田宣・青木毅編(共著), 査読無し, 2007 年.

[学会発表] (計 13 件)

- ① 小林芳規 日本のヲコト点の起源と古代韓国語の点吐との関係 韓国・口訣学会

- 〈韓国技術教育大学校〉 2010年2月18日
- ② 小林芳規 日本の訓点・訓読の源と古代韓国語との関係 日韓訓読シンポジウム〈麗澤大学記念講堂〉 2009年11月21日
- ③ 小林芳規 漢文訓読史研究の課題と構想 第100回訓点語学会〈京大会館〉 2009年5月24日
- ④ 小林芳規 日本の經典訓読の源流—助詞イを手掛りに— 韓国・口訣学会国際学術大会〈韓国技術教育大学校〉 2009年2月10日
- ⑤ 山本真吾 9世紀の漢字片仮名交じり文におけるヲト点の使用について 韓国・口訣学会国際学術大会〈韓国技術教育大学校〉 2009年2月10日
- ⑥ 鈴木恵 『ほんのこべや』の舞台裏—続貂— 全国教職員セミナー2008〈朱鷺メッセ〉 2008年9月13日
- ⑦ 小林芳規 角筆文献の発見—その拓く世界— 広島大学総合博物館公開講演〈広島大学文学部〉 2008年5月10日
- ⑧ 山本真吾 変体漢文解読の方法と実際—変体漢文訓点資料の諸相— 韓日国際ワークショップ〈韓国ソウル大学校〉 2008年2月21日
- ⑨ 小林芳規 日本語訓点表記の起源と展開過程—白点・朱点の始原を中心に— 韓日国際ワークショップ〈韓国ソウル大学校〉 2008年2月20日
- ⑩ 山本真吾 僧侶の申文—聖教類の諸文体— 慶応義塾大学中世文学研究会〈慶応義塾大学〉 2007年12月7日
- ⑪ 山本真吾 平安時代の仏書漢文及び仮名交じり文について 国際シンポジウム〈中国・山東大学外国語学院〉 2007年9月15日
- ⑫ 小林芳規 日本に伝来した宋版一切経の角筆加點—韓国の角筆点吐との関連— 韓日国際ワークショップ〈韓国ソウル大学校〉 2007年7月3日
- ⑬ 小林芳規 角筆による東アジアの漢文読解法交流の軌跡の追究 アメリカアジア研究学会年次総会発表〈アメリカ、ボストン市〉 2007年3月24日。3月26日ニューヨーク、コロムビア大学、3月27日コーネル大学にて講演、アメリカ

〔図書〕(計2件)

- ① 月本雅幸, 肥爪周二, 藤井俊博編 武蔵野書院 古典語研究の焦点 2010年 1008頁
- ② 佐々木勇 汲古書院 平安鎌倉時代における日本漢音の研究(2冊) 2009年 研究篇1068頁 資料篇690頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

小林 芳規 (KOBAYASHI YOSHINORI)  
広島大学・大学院文学研究科・名誉教授  
研究者番号: 10033474

### (2)研究分担者

佐々木 勇 (SASAKI ISAMU)  
広島大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 50215711

沼本 克明 (NUMOTO KATSUAKI)  
安田女子大学・文学部・教授  
研究者番号: 40033500

月本 雅幸 (TSUKIMOTO MASAYUKI)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 60143137

鈴木 恵 (SUZUKI MEGUMU)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号: 60163010

原 卓志 (HARA TAKUJI)  
鳴門教育大学・学校教育学部・教授  
研究者番号: 00173063

山本 真吾 (YAMAMOTO SHINGO)  
白百合女子大学・文学部・教授  
研究者番号: 70210531

西村 浩子 (NISHIMURA HIROKO)  
松山東雲女子大学・人文学部・教授  
研究者番号: 20248339

### (3)連携研究者

佐藤 利行 (SATO TOSHIYUKI)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号: 80178756  
(H20→H21)

山本 秀人 (YAMAMOTO HIDETO)  
高知大学・人文学部・教授  
研究者番号: 30200835  
(H20→H21)

青木 毅 (AOKI TAKESHI)  
徳島文理大学・文学部・准教授  
研究者番号: 70258317  
(H20→H21)

### (4)研究協力者

来田 隆 (KITA TAKASHI)  
龍谷大学・文学部・教授  
(H20→H21)